はじめに

本講義は東大をはじめとした難関国公立大学合格を目標とする講座です。

直前期の現代文の勉強で重要なのは、「今まで習ったことができるようになっているかを確認すること」です。習っていないことは本番ではできません。今まで考えたことがないものが、本番で考えられるわけもありません。

そこで、直前期では

①「読解法」

②「設問解法」

という2点を重点的に確認していくことになります。

本講義では難関国公立大の最新の過去問を用いて、今まで学んできた「読解法」と「設問解法」が使えるものになっているか、最終チェックを行います。ですから、「できるからやらなくても良い」とは考えないでください。「できるようになったことを再確認する」というつもりで、臨んでください。

この冬、みなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

① **文法**
② **構文**
③ **論理**

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

- **「でない」という否定**
- **「かつ」という連言**
- **「または」という選言**
- **「ならば」という条件法**

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ講義を受けるだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」や「傍線部」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして設問に解答してください。

冬期講習では「制限時間あり」で60％を目標として解答してください。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　問題を解く。解答の根拠をメモしておく。

Ⅱ 講義について

映像授業を受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、「復習タイム」に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答を書く」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。**ただし、本文に線を引くのは構いません。**

講義ポイント

講義中はメモを取らない。説明や図は講義後ノートに書く。

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント　**復習ポイントを覚える。問題を解き直す。**

難関国公立大 現代文　目次

第一講……p.8
第二講……p.15
第三講……p.27
第四講……p.36

第一講　傍線部の問題ファイナルチェック　35分

次の文章を読んで問いに答えよ。

音に対する感受性の深さ、東南アジア各地、ことに山間辺地に住む少数民族をたずねて気づくこと、驚くことの一つはこれである。

ボルネオ内陸に住むイバン族の若者と川ぞいの道を歩いていたときのこと、かれはふと足をとめてこういった。「この川の名はスンガイ・トゥビ、川上の流れの音がコトコトと聞こえてくるでしょう、あの音が、この川の名になったのです」と。

私はそのとき、わが国の「風土記」のなかの地名起源の説話を聞いているような、自然と文化が一つになって息づき、そこにものの名が誕生する現場に立ちあっているような、不思議な感動にとらえられたことを覚えている。

イバン族の村では、朝ごとにその日一日分の米を立杵（たてぎぬ）、立臼を使って精米する。かれらの臼は底の部分にしかけがあって、臼をつく杵の力が床下の腕木に伝えられ、その腕木が同じく床下に吊りさげられた長板をたたく、

という構造になっているのである。だから、臼をトンとたたくと、床下の長板が打たれてトン　トン　トンと鳴る。腕木はいくぶん弾力性をもっているので、杵の音が反復、(1)ゾウフクされて響くのである。(ア)臼という生活道具が、ここでは同時に楽器でもあったのである。

　朝ごとにつく臼の音が、そのあたり一面にこだまする。その音を聞いて働く女性たちがたのしくなり、村びとがたのしくなる。それだけではない。この心地よい音は、もともとは、屋根裏部屋の大籠のなかにいる稲魂（いなだま）、つまり稲の神を喜ばせるためだったのである。眼（め）に見えない神をよろこばせる。そのためには心地よい音が、音楽が必要だったのである。

　マレー半島の中部、ベラ湖のほとりにスムライ族という民族が住んでいる。私はかつてこの民族をたずねて、ブバリンという名の奇妙な道具を見た。それは一言でいえば二枚羽根のプロペラで、その両端に竹笛がついていた。羽根の長さはそれぞれ約一メートル、プロペラは支架によって支えられ、風に向かって自由に向きを変えるように工夫されていた。

　村びとの話によると、村のなかでももっとも高い木の梢（こずえ）にブバリンをとりつけると、風とともにブーン　ブーン　と音を立てる。この音によって、遠方の森のなかにいる狩人（かりゅうど）が自分の村の所在を知る、ということであった。(イ)音の灯台ということであろうか。

村びとの説明はそうなのであるが、私としては若干の疑いを残している。いくら森のなかとはいえ、先祖代々同じ土地に住んでいる人間が、道に迷うなどということがあるだろうか。私には考えられないのである。

そうなってくると、ブバリンの音は何を意味するのだろうか。ひょっとすると、それは他界への信号であり、また、他界からの呼びかけなのではなかろうか。いずれにしろ、この奇妙な道具、道具であると同時に楽器であるものの発する音、そのうなり声のなかに、もっともっと近づき、耳をすませてみたいのである。

われわれは民族の文化を機能的に分析し、合理的に解釈することに慣れているけれども、実は、かれらの文化のなかにはわれわれの想像を超える、異次元の世界が映っていたかもしれないのである。

バリ島のあの怪物のような凧（たこ）、ラヤン（凧）、ベベアン（魚）にしても同じことである。魚をかたどった墨色の凧が、昼となく夜となく、天空高くあがって低いうなり声をあげている。あの声は、よくいわれているように、単なる魔よけなのであろうか。それは魔を(2)ハイジョするための道具なのだろうか。そうではなくて魔の世界との交流、交感、共存が、あの奇怪な音によって、不思議なうなり声によって、果たされていたのではなかろうか。

かつてイバン族の村に(3)タイザイしていたとき、村長のカロンさんがさまざまな鳥、けものの声を、驚くほど上手に真似てみせてくれたことがある。

その声をかならず録音して帰ろうと思っていて果たさなかったのであるが、カロンさんの声を聞いているうちに、(ウ)声によって、人間の世界と野生の世界との交流が、二つの世界の共存が、表面的にではなく、人間の文化を超えた深層において成就されていることに感動したのである。

われわれは日ごろ、言葉という眼に見えない(4)アミメ、言葉というクモの巣のとりこになって、局限された、不自由な生活を強いられているのであるが、実は、言葉の向こうに声があり、声の向こうに音があり、さらにその向こう側に、音以前の世界があったのではないか。その音以前の世界から、音が生まれ、音が誕生し、言葉がよみがえってくるのではなかったろうか。

われわれ人類学の徒の野外調査、つまりフィールドワークも、結局は「奥の細道」をたどる歩みと同じであって、常に、(エ)なんとかして「岩にしみいる声」を聞きたいと思っているのである。その声、その音のなかに、荘厳な世界を(5)コンリュウしたいと思っているのである。

（岩田慶治「音・時・言葉」による）

問㈠　傍線の箇所⑴⑵⑶⑷⑸の片仮名を適切な漢字に書き改めよ。

問㈡　傍線の箇所㈦に「臼という生活道具が、ここでは同時に楽器でもあった」とあるが、筆者はイバン族の「臼」に「楽器」としてのどのようなはたらきを見出したのか。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問㈢　傍線の箇所㈧「音の灯台」とは、スムライ族の「ブバリン」に対するどのような比喩的解釈か。その内容を四十五字以内で説明せよ。

問㈣　傍線の箇所㈨に「声によって、人間の世界と野生の世界との交流が、二つの世界の共存が、表面的にではなく、人間の文化を超えた深層において成就されている」とあるが、「声」によって成就される「交流」や「共存」とはどのような状態か。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問㈤　傍線の箇所㈩に「なんとかして『岩にしみいる声』を聞きたいと思っている」とあるが、ここで筆者はどのような態度によってフィールドワークをおこなおうとしているのか。本文全体の趣旨をふまえて七十字以内で説明せよ。

問(一)

(1)	(4)
(2)	(5)
(3)	

問(二)

問(三)

問(四)

問㈤

解答解説

第一講　解答

問㈠

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
増幅	排除	滞在	網目	建立

問㈡

杵で臼をたたく音が働く女性たちと村人を楽しませ、さらに稲の神である稲魂を喜ばせるはたらき。

問㈢

灯台の光が船乗りに港の所在を教えるように、ブバリンの音が狩人に村の所在を教えるという解釈。

問㈣

機能的に分析し、合理的に解釈する言葉の世界と、音以前の異次元の世界がつながっている状態。

問㈤

言葉や文化を機能的に分析し、合理的に解釈する文明社会の態度を自明視せず、分節された音以前の世界との交流、交感、共存を捉えようとする態度。